

	項目	評価単位	評価のまとめ
A	1 教 育 課 程	1. 教育目標	○幼児の生活全般を捉えたものとなっている。 ○幼児の実態や教育課題と照らし合わせて話し合いの機会をもち、見直しにつなげていきたい。
		2. 教育課程の編成	○探究力、活用力を意識する中で、子ども達の姿の中に「探究」を探そうとするようになってきている。 ○「学びの概要」は、今後も実践に照らし、研究のテーマとのつながりをもっと深くしていく必要がある。
		3. 年間保育日数・時数	○教育に必要な日数、時数を確保し、保育時間の変更については早めに連絡するよう努めた。 ○5歳児の保育時間を年度途中で15分延長。延長の時期に関して振り返り、適切な時期について検討したい。
		4. 教育活動とその成果	○朝会や拡大打ち合わせ会で、各学年の情報伝達が定着。保育後に子どもたちの様子を伝え合い保育が向上した。 ○学年間の連絡をさらに密にしていきたい。協力し合いながら、進めていく工夫ができるのではないかと感じる。 ○職員会議録を非常勤の先生方に回覧、必要分はコピーするなど情報の共有に努めたい。
		5. 行事	○行事は精選されてきている。事前の細案をたてるようになったことで、より計画的に行事が展開するようになっていく。 ○2学期末に行事が立て込みがちである。経験内容を吟味し、行事の在り方を見直していきたい。 ○5歳児は9月の遠足をやめたことで運動会に集中して取り組めた。3学期の遠足は他団体が少なくゆつくりできる。
		6. 進路指導	○幼小連絡進学検討委員会を定期的に開催し、連絡進学や内規の見直しを進めることができた。 ○幼児教育で大切にすべきことを守りながら、小学校に何をにつないでいったらよいかを丁寧に考えていきたい。 ○保護者の対応は早い時期から行い、子どもたち一人一人にとって適した進路選択の幅が広がっていくように対応したい。
		7. 研究・研修	○「透明」を切り口に研究を進め、教師にとっても「探究的」な研究になりつつある。 ○「探究力」が発揮される子どもの姿、遊びを丁寧にとらえ、そのプロセスを事例をととして共通理解している。 ○事例を自発的に出しあい、みんなで検討しあう体制が続けられている。 ○研究内容を広く発信し、理解が得られるような表現の工夫を重ねていきたい。 ○複数の大学の先生方と研究会をすることができたが日程調整が難しい面もあった。計画的に取り組んでいきたい。
	学校運営（教育課程を支える諸条件）	1. 経営・組織	○安全面での改善が進んだ。 ○学校関係者評価委員会を立ち上げ、現在の保護者代表の意見を直接聞く機会を保証できるようになった。 ○園務分掌は、担当者だけがわかっているのではなく、途中経過報告や共通理解を早めにする必要を感じた。共通理解のはかり方や、わかりやすい伝え方などを工夫していきたい。
		2. 出納・経理	○経理の出納システムの見直しがされ、より厳正な会計管理に改善された。 ○経理の出納について、副園長が必ず最終チェックをするなどの手順を確実に踏んでいくことが定着した。 ○学級定員の削減が実現した結果、予算枠が縮小。次年度について予算額の検討を進めている。
		3. 施設・設備	○共有空間の改善や整備を続けやすいコンディションを保っている。 ○アトリエが整理されものが探しやすい。子どもの要望に応じてすぐに活用できる。 ○教材室は、整理して使いやすくなったにもかかわらず、物をもとに戻すことができず散らかしてしまいうことが度々あり改善したい。 ○資料室や倉庫などでは、保管するものと、使用するものが混在している。改善策を皆で構想しながら整理していきたい。
		4. 健康	○学期に1回全教員でスクールカウンセラーと話し合えたことで、他学級の問題も全体の問題としてとらえることができた。 ○保護者にとってスクールカウンセラーの存在が身近になっていくよう、手紙や懇談の場をつくっていった。 ○昨年作成した「気づきのシート」を活用し、スクールカウンセラーと話し合ったり巡回指導の際の資料に使ったり、というシステムがスタートできた。今後につなげていきたい。
		5. 安全	○安全点検の結果を養護教諭が一覧にまとめることで、全体の様子がわかり、早急に改善、安全整備に努めた。 ○避難訓練の回数を増やし、段階を追って幼児が主体的に避難できるようになった。教員の課題も明らかになり、非常時の教員の役割、動き、連携の方法など、スムーズに対応できるようになっている。 ○防災備蓄用品は、大学の予算措置を受け、新規の備蓄が進んでいる。今後も毎年、確認し必要な備蓄を進めたい。 ○園児の怪我については、全職員で共通理解し、指導の見直しや環境改善等につなげていく。 ○2月に職員対象にアレルギーについての研修会を開催。エビペンの使用についても学ぶことができた。
		6. 情報	○今の時代に合った情報管理プランの見直しを、情報専門委員会行いつつあり、次年度には完成させたい。 ○SDカードやUSBなど個人持ちの数も増えている。保管方法、どのように使うと効率的かなど検討したい。 ○ホームページの更新を定期的の実施、情報公開できた。ホームページの内容はさらに検討していく必要がある。 ○情報担当教諭が仕事を担っており、担当者意外も、情報公開について対応できるようにしたい。
		7. 開かれた学校	○学校関係者評価委員会の発足、保護者アンケートの実施など工夫していると思う。 ○チャボを通して後楽幼稚園と交流。筑波大学附属大塚特別支援学校幼稚部との交流などが始まった。 ○区や都の動向については、もうすこし意識的に関わっていくようにした方がいいかもしれない。
		8. 入園検定	○昨年度の実施方法を検討し、改善すべき点を明らかにし、今年度の検定に生かすことができた。 ○入園希望者が本園の教育について理解が得られるよう、学校説明会を実施する方向で検討を始めていきたい。
		9. 保護者との連携	○個人面談はできれば学期ごとに設けた方がよい。 ○緊急メール配信システムは、空メールを戻すことも定着してきており、十分機能するようになってきた。 ○掲示板での日々の様子の伝達をまめに行うよう尚一層努力したい。

B	大学との連携	1. 連携研究	○幼小接続期研究は継続しているが、難しさを感じる局面が多かった。 ○メンタル・ヘルス調査との連携は、形式化してきた。保護者に役だつ情報はあまり提供できなかった。 ○子ども学シンポジウムに引き続き、エクセルやハーフミラーとの連携を図っていきたい。
		2. 授業交流	○臨床実習の記録は充実している。記録を読み合い、教員間の連携に生かしていきたい。 ○高校生の参観について。短時間で出入りが多いことにもだんだん慣れてきた。実施時期については検討したい。 ○中学生のミニコンサートについては、事後の様子などを伝えたり、やってみた感想を聞いたりするとさらに良いと思う。
		3. 教育実習	○大学生10名(4週間)を受け入れた。 ○今年度より後期実習を9月にした。運動会には重ならず日々の話し合いの時間も比較的確保できた。 ○時期的に運動会に向けての活動の組み立てに難しさがあり、次年度ももう一回同時期に実施した上で検討したい。 ○実習期間中に、教材研究をしたり、丁寧な教材準備ができるような計画を立てていく必要がある。
		4. 専門委員会	○職員会議で各委員会の報告を行うことで現況が伝わり、共通理解が進んだ。 ○幼稚園は職員数に限りがあり委員会が多くて大変という現実がある。 ○評価専門委員会では、学校関係者評価委員会立ち上げに向けて内規を整備し、委員会を実施することができた。
		5. 大学の講義担当	○「保育指導法」を担当。受講者が増えているので、会場や観察の仕方など工夫する必要がある。 ○学生の成績等の個人情報の保管の仕方が年度によって異なるので、大学に確認し整理していくことが必要である。
		6. インターンシップ	○今年度はインターンシップの希望者なし。 ○教育実習があるために、インターンシップの希望者がいなくなっているが、実習とは違う意義があることを伝えていきたい。
	社会貢献	1. 参観・研修受け入れ	○保育参観・施設見学者延べ人数約300名(海外100名 国内200名) ○教育内容についての説明や質疑応答の時間や、参観後に研究会をもてると、双方にとって有意義な受け入れになった。 ○3月1日「グローバル人材キックオフシンポジウムのキャンパスツアー」に参加する海外からの参観者80名を受け入れ、雛人形を見学していただいた。本園が有する歴史的資料や文化財を公開する機会を今後も積極的につくっていきたい。 ○参観者には、可能な限り、いずみナーサリーの見学や大学資料室の閲覧の機会も設定した。ナーサリーや図書情報チームの協力を得て、今後も乳幼児期の教育についての発信や歴史的資料の提供などを推進していきたい。
		2. 公開研究会開催	○公開保育を年1回実施した。日本全国から約100名の参加者があり、幼児教育の在り方について学び合うことができた。 ○公開保育への参加については、申し込みが多く寄せられすぐに申し込みを締め切る結果となった。次年度は2回実施とする。 ○準備や当日の受付など保護者の協力を受けている。参観者が多いということについても、理解を得られている。研究の成果を保護者にも伝え、保護者の協力にこたえていきたい。
		3. 現職研修	○ラウンドテーブルは、附属の教員の参加者、他の職種の参加者をともに多く、よい現職研修の場になっている。 ○本年度は連携研究中間報告会に非常勤教諭も出席した。合同研の担当で幼小部会で報告ができた。
		4. 途上国支援	○中西部アフリカからの研修生の参観は定着し、子どもたちとも交流でき気負わずに楽しめるようになっている。 ○事前に各国の旗を飾ったり、国の位置を地図で調べて掲示したりしたことで、子どもたちの関心を高めることができた。
		5. 出版活動	○2月に研究紀要を作成し、各教育機関等に配布し、全国に向けて発信した。 ○具体的な事例に加えて写真を活用し、見やすく、理解しやすい資料作成に努力した。
		6. 各種研究会への協力・支援	○十文字大学の夏の研修会での事例提供、保育実践研究会での事例提供、エクセルでの事例提供を行った。 ○各地からの要請を受けて、幼児教育についての講演会、研究会における指導助言を行った。 ○「幼児の教育」季刊リニューアル後3年目となり、編集委員を中心に紙面作りに多面的に貢献した。
		7.その他	○11月に2回目の松野クララ歴史に学ぶ会を開催し、講演会には60名が出席した。茨城で開催された豊田英雄展の見学に行くなど、本園の歴史を学び、発信する取り組みを積み重ねることができた。 ○豊田英雄、松野クララ関係の歴史部分は深くなっているが、その他の残していくべき歴史について検討を重ねたい。

平成24年度学校評価(自己評価)まとめ（課題）

- <教育活動>
- ・全職員で連携を密にとり、充実した保育活動を展開できた。
 - ・「探究力・活用力が発揮される生活」をテーマに実践と研究に取り組み、からだを通して感じ、よく見たり考えたりして遊ぶ幼児の姿が多く見られた。
- <環境・遊具>
- ・園庭の樹木の状況を把握し、必要な手当をした。土壌改良も含め、よりよい園庭環境を維持するために今後も樹木保全に努めていきたい。
 - ・木製の竹馬の導入により、自ら挑戦しようという姿が多く見られ、成果があがった。
- <安全>
- ・避難訓練の在り方を見直して実施した。訓練を重ねる中で、避難の仕方や約束が身に付き、落ち着いて避難できるようになった。
 - ・食物アレルギーについての研修会を実施した。食べる活動を実施する際の注意事項を確認し、安全面の徹底を図っていきたい。
- <連携・研究>
- ・連携研究3年目であり中間報告会を開くことができた。全職員が各部会に所属し学んでいることを園内で伝え合い学びを広げることができた。幼小連携について次年度保育学会で発表をする。小学校と連携し研究を深めていきたい。
 - ・「探究力・活用力が発揮される生活～1年次～」の研究成果を紀要にまとめ、全国の関係各機関に配布した。
- <社会貢献>
- ・国内外の教育関係者に対して、保育公開、施設見学、資料閲覧、教育内容説明などの機会を年20回開催、参加者は約300名だった。
 - ・年1回公開保育を実施し、全国から参加された約100名の方々と保育の在り方について協議を深め、研究成果の発表を行った。
 - ・文京区子育てフェスティバルへの参加、松野クララ記念歴史に学ぶ会の立ち上げなど、幼児教育の歴史についての発信に力を尽くした。

